

昭和二十四年七月二十五日 第三種郵便物認可
発行(毎月一回・十五日発行)

(通第三一二号)

慈光

第二十七卷

第六号

次

無為涅槃……………近角常観……………(1)

こころ……………福島政雄……………(8)

よろこびのあと(二)……………菅瀬忠子……………(12)

目

念仏詩抄……………木村無相……………(17)

現代と浄土真宗……………花田正夫……………(20)

無為涅槃

近角常觀

釈尊の最後の御説法の涅槃經において、釈尊出世の本意がいよいよ充分に顯（あらわ）れたことは前に述べたところであるが、立ちかえって、仏教全体の上において、涅槃ということは、如何なる宗旨においても肝要である。大きく云えば大小乗の仏教、シヤム、ビルマ等の南方仏教も、今日研究せられている原始仏教の阿含（あごん）等の經説でも、涅槃をもって極要とするということは動かぬところである。

従来、涅槃という言葉辭を滅度と訳している。ところが滅度の滅の字は火を吹き消すという意味であるから、その点から誤って古來仏教以外からは、仏教の涅槃というのは虚無である、寂滅である、身も亡び心も滅するのが仏教の目的であると云われている。現今の西洋の學者も、仏教全体は無に帰することを理想とするものと考えている。

そればかりでなく同じ仏教徒の間にあつても、所謂大乘仏教徒の方からは、小乗仏教徒の涅槃は灰身滅智（けしんめっち）身心都滅（しんしんとめつ）であると云うてい

滅というのは、火そのものが滅してしまふのではない、火が風のためにゆらゆらしているが、風がやむと立派に燃えあがるのを滅というたのである、涅槃とはこの心が、いろいろの境界や因縁の風にあふられるのが止んで、静寂に帰したところである、という様に云うていると、かように聞かされた。

原始仏教の涅槃も、ただ消えてしまふというのではない、それを消えてしまふのだと思つたのはまげたので誤つていのである。大乘教徒から見ても、かの小乗の徒の涅槃は全く身を灰にし、智慧を滅してしまふのだと云うているがこれについては私は未だ十分の研究をしていないが、とに角、大乘教徒からはまげて見た説であると断じようとしている。

しかし、それほどまでに派の分れたのには多小意味があることと考へる。前に律法主義、信仰主義ということをもつて、法然聖人は従來の律法的の仏教を破つて、本願念仏に入られた。その念仏を次の或る人には律法的に取つて、修行的に念仏をはげんだ。そこで親鸞聖人はさかんに信仰を云い立てられたように、涅槃についてもこれと同様の經路をたどつたのであろう。

本来、仏教の涅槃の意義は、釈尊が、かの三迦葉（さんかしやう）に對しての説法によつても明かである。彼等が

る。日本支那の仏教徒は概してこの大乘教徒の説を踏襲（とうしゅう）している。しかしそれは甚だまげたものである。第一南方仏教徒について彼等の信じる涅槃の意義はどうかとたずねれば決して涅槃は虚無である、都滅であるとは云わぬ。滅とは何を意味するかというと、滅とはただ消えて亡くなることでない、煩惱が滅するのである、迷いが滅するのである、生死が滅するのであると答へる。

鈴木悌君という人が久しくアメリカで仏教をひろめて居つたが、昨年来、西洋を巡回して、コンスタンチノーブルから印度へ出て、それから北方に轉じ、更にまた轉じてシヤム、雲南地方を旅行して帰つてきた。その人に私は過日神戸で遇つた。その時、私の講義が丁度涅槃の靈境について話すことになつていたから、鈴木君からも南方仏教徒の涅槃觀を話して貰つた。君の話では、南方の仏教徒は涅槃にたとえるとローソクの火を消したような状態である、火は消してもローソクが残る、迷いの火を消しても悟りのローソクは残っていると積極的に云うている、甚だしいのは

火につかえ、火を拜するのを教化せられようとして、直にそこにある火をもつて来て、汝等の心には欲の火が燃えつつある、目にも欲の火が燃えあがつている、耳にも鼻や口にも、触れるものにおいても欲の火が燃えているではないか。汝等は欲火のために苦しみつゝあり、その欲火の滅するところこそ、ここに平和あり、そこが涅槃であるとお説きになつた。このように、仏の説かれる涅槃は実験的信仰の妙味である。この実験を傾けてそそいで下さる仏陀慈愛の靈水を受けて、自己心中の欲火を消して、同じく涅槃の妙味を得たのが、眞の仏弟子である。

しかし、多くの仏弟子の中にはこの仏の説法を律法的に受けて、欲を起してはならぬ、見たいものを見てはならぬ、この世のものは皆さげねばならぬと偏執（へんしやく）して、大いに仏陀の本意を失うようになった。これを他から非難して小乗教徒と云うたのであろう。本来、釈尊の教は、不足勝な人間の心中に大平和を来らしめて大慈悲のあふれて来る、即ち信心歡喜の実験の披瀝である、かの阿含の説を読むとこの状態が十分に見られる。

又釈尊がすでに成道されて、かの五比丘に遭われたとき「汝等よ、我を友よ友よと呼ぶなかれ、我は如来である」と云われた。ここにすでに如来があり、涅槃の平和の境がある。それを律法的に一方から、涅槃説はこうである、欲

は消さねばならぬ、身は捨てねばならぬ、心に欲を起すから心は亡ほさねばならぬという工合に、律法主義におちいつて、枯木死灰のようになった。

これに反対する大乘教徒は、涅槃を積極的に解釈して、涅槃は常樂である、かの小乗教徒は、淨樂常我（じょうらくがじょう）を四顛倒と嫌いて、一切何物も滅して無くなるのが涅槃であると云うは、大いに仏意を失つたものである。眞の涅槃は煩惱の火の滅したところで、そこに如来常住の光明があらわれ、大我があらわれ、大樂の境界が開けるのであると云うようになったのであろう。

要するに涅槃を律法的に化石したのが小乗である、それを實驗的に破り来りたが大乘である。これはただ仏教の根本思想から一言ここに及んだのであるが、歴史的に研究してもこの考えと大差はあるまいと信ずる。かく小乗であれ大乘であれ、涅槃は平和の境である、我等はこの涅槃を得ねばならぬ。珍味をととのえた膳に対しても箸を下さねばその詮はない。涅槃をただ批評的に討究しても、自らその妙味を味わうにあらざれば徒ら事である。

釈尊成道（じょうどう）の当時、八万四千の煩惱を消滅して八万四千の大智慧の光明を放ち、大平和大安樂の靈境に安住し給うた。我々も自分の心から自から光明を出さぬけれども、この心の上に仏陀の慈光溢れ来て、信樂の開

化身の上に顕れた涅槃である。それがいよいよ八十歳の涅槃経を説かれた当時に入られた涅槃が、無上涅槃である。小乗仏教と云われる遺教経でも、大乘の大般涅槃経でも、この事実は同じことであつて、クシナガラ城からニレンゼン河のほとりて釈尊が大涅槃に入ろうとせられた時、阿難は泣いて「如来滅を示し給うこと何ぞ甚速なる、如来は大燈炬なり、何ぞ円寂を示し給うこと甚だすみやかなる」と云うて慟哭（どうこく）した。仏弟子としてはもっとものことである。

ここに釈尊は弟子達のために涅槃経をお説きになった。

その大要は、この世は盛者必衰、会者定離である、人生無常の有様はまことにこの通りであるが、自分が今入ろうとしている大涅槃の境は、逢うも離るるも、行くも返るもない、如来の色身（しきしん）は滅するといえども法身は亡びることはない、法身とは涅槃の靈境であり無余涅槃である、仏陀の広大な境界である。この肉身が亡んでも亡びないものがある、如来は常住で変易のあることはないのである。汝等よ悲しみをやめよ。自分は今大般涅槃の如来の境に往くのであるということに帰する。この点では小乗も大乘も皆一致である。これを他力信仰の上で云うと、大聖釈尊はあくまで尊い肉身を持っていられるのであつて、我等の身体と比較すべきではないが、無意識のうちに、我等が

発する端的（たんでき）に、是心作仏（せしんさぶつ）、是心是仏で、仏陀はこの心に来り、この心仏陀の光明に満ち満ちて、自から釈尊のように涅槃を悟るのではないが、仏の恵みの入り来たところ、すでに一介の涅槃を得たりと云うべきである。いわゆる、能く一念喜愛の心を発すれば煩惱を断ぜずして涅槃を得るのである。煩惱が直にかわりて涅槃の味となる。煩惱即菩提の妙味が大乗の至極であるならば、この他力信仰は即ちそれである。生死の中にありながら生死に落ちぬのが大乘の理想であるならば、信仰の一念に即得往生の大安心を決定するこの他力信仰は、又実に大乘の極致である。しかしそこに一つ殊更に親鸞聖人の注意を興えられたことがある。それは何かというに、いかにも信仰の一念は涅槃の靈境が直々に至り届いたのであるが、未だすでに絶対の仏陀になったとは云えない。肉身を有し、煩惱の宿る身体を捨てぬ間は、信仰そのものは、絶対の仏心であるが、容れものは依然たる煩惱の肉身である。それだから現生（げんしょう）では正定聚の仲間とまでは云えるが、未だ直に涅槃の極致にいたったとは云うてはならぬという点である。

さてその涅槃の極致を無上涅槃とも無為涅槃とも云うのである。かの大聖釈尊は三十五歳の時それを証得せられたが、それはなお肉身を持ったまま証られた涅槃である。応一念、仏の恵みを信じ喜ぶ有様が、仏の成道の有様にあたかも符合しているように感じる。釈尊が如来の色身は滅しても、法身は亡びず、自分は今涅槃の境に行こうとしていると云われた、その無為涅槃の境は、即ち我等が平生において往生しようとして期待している極樂無為涅槃界である。涅槃経では表面には無為（むい）涅槃界は、弥陀仏の極樂世界であるとは云うてないけれども、サラソウ樹の花の下に種々無量の諸天の来ることは、なお西方極樂世界の如しという形容が見えている。

従来仏教を解釈するのに余りに分解的に過ぎたからかえって根本の意義を解しにくくなったことが多いと思う。たとえば方便という言葉も、善巧方便、權化方便などと引き分けたために、かえってむづかしいことになったが、方便とはつまり、仏の広大な恵みから色々の手段をして下さることを云いあらわすに過ぎないのではあるまいか。今の法身という言葉も、或は三身門の法身だの、三徳門の法身だのといくつにも分けて云うが、つまりは法身とは色身に對する言葉で、肉体は亡んでも亡びないところの或広大な境を云うたのである。親鸞聖人は証卷で、我等が極樂に往生して得させて頂く眞実の証りの有様を色々云うておかれたが、要するに現生において正定聚に住する者は、この一生を終つて後は、必ず滅度に至るといふのである。こう云え

ば非常に客観的に聞えてその味わいがすくないようであるが、これは理屈では無い、全く信仰の実験である。自分が仏陀のお恵みを頂いている内心の味から云えば、現在正定聚である。この正定聚の処ではや死後滅度の靈境を意識の上
に味わうことが出来る。我々が仏陀、御親のお恵みを味わうならば、即ち親許へ心が往っている、よって命終るなり親の家庭へ帰れることは丁度刑務所の囚人が、鉄窓の中にあつて広大な親の慈悲に氣付いて、ああ有難いと喜ぶ一念が、親の心の届いたので、その時はやくすでに心が親許へ帰っているようなものである。これを正定聚と云うたのである。いよいよ刑期が満ちて刑務所の門を出るなり直ちに一刻も猶予せず親の家に帰る、これが必至滅度、極楽往生である。双方の意志の通つてゐるところで、時ければ何時でも帰れるのである。刑務所を出されたときに家に帰るときまるのではない、家に帰れる資格は在獄中に出来るのである。今もそのように現生において未来の往生成仏の疑いのないのを正定聚と云うのである。現生正定聚ということ
は經文の表面に見えてはないが、聖人が現在の心持から遠慮なく云われたのである。すでに現在に仏心の頂けた時に定まる往生であるから、臨終まつことなしである。刑務所を出ると直に飛んで親許へ帰るのであるから必ずしも親の迎えを要としない、親許の迎えがあつても無くても、意志

頂く。その有様を特に仰せられたのは、かの八十八歳の御筆による自然法爾章（じねんほうにしよう）である。そこに自然法爾の文字を解釈して広大な弥陀の本願力をあらわし、この力によって涅槃にいたるまでを示してある、今その要を摘んで云えば、

自はおのずからという、行者のはからいにあらず、しからしむということばなり。然らしむということば、行者のはからいにあらず、如来の誓にてあるが故に、法爾というは如来の御誓なるが故にしからしむるを法爾という

とある。この自然法爾の言辭は親鸞聖人の語と思ひのほか、法然上人の常の仰せであつた。黒谷伝に、

法爾の道理ということあり、ほのおは空にのぼり、水はくんだりさまに流る、菓子の中にすきものあり、あまきものあり、これらはみな法爾の道理なり、阿弥陀仏の本願は名号をもて罪惡の衆生を導かんと誓いたまいたれば、ただ一向に念仏だに申せば、仏の来迎は法爾の道理にて疑いなし云々。

これで見れば法然上人の常に仰せられた言葉を、親鸞聖人は非常に味深く感じて八十八歳まで、否生命終るまで師教のままを繰返しておられたのである。法然上人と云う御名前からが、何となく上人のこの信仰を現していると思わ

の通うてある以上は帰るのに間違ひはない。どうして来迎の有無に用事があるうか。これを即得往生（そくとくおうじょう）とも説き、又平生業成（へいせいごうじょう）とも名づけられてある。この平生業成、即得往生の身と定まつた者が、臨終の夕べに極楽に往生すれば、もう再び三界に流転することなし、これを畢竟寂滅（ひっききょうじやくめつ）というたのである。これこそ無上涅槃である。無上涅槃は即ちこれ無為法身なりとあつて、何とも云えぬ迷いの離れた境界である。親鸞聖人は末灯鈔に、
安樂淨土に入りはつれば、即ち大涅槃をさとるとも、又無上覺をさとるとも、滅度にいたるとももうすは、御名こそかわりたるようなれどもみな法身ともうす仏のさとりをひらくと云々

と云われた。そこに氣づいて考えて見れば、法身とは仏の証りの境界である。法身即実相なりとは、さとりの境界の眞実な有様が実相である。世界を見透すところの仏智眼に見える一切諸法の眞相は、法性である、眞如である。我々も生命が終ればこういふ仏の境界へ往かして貰えるのである。

一体眞如と云い、一如という仏陀の境界は、その境界に到らねば解からぬのである。云えば云うだけ口ばかりに云つて、實際は解からぬが、我々は必ずその境界へ往かして

れる。次に、
自然というはもとよりしからしむるということばなり
弥陀仏の御誓の、もとより行者のはからいにあらずして、南無阿弥陀仏とたのませたまいて、むかえんとはからわせたまいたるによりて、行者のよからんともあしからんともおもわぬを自然とは申すぞとききて候。
こゝまでは如来広大な御誓を我心に受ける相を、善からんとも悪しからんとも計らわぬというたのである。

誓のようは無上仏にならしめんと誓いたまえるなり、無上仏と申すはかたちも無くまします、かたちもましますまぬゆえに、自然とは申すなり、かたちましますとしめすときは無上仏とは申さず、

このところでは極樂のさとりの方へ自然の字をつかつてある。従来は願力自然であるとか、無為自然であるとかと二つあるように云うて、自然の言辭は同じけれども、意は異なるというて居つたと聞いて居るが、私にはそれは首肯が出来ぬ。無為自然は仏陀の広大な御恵みであつて、その仏その恵み即ち願力自然のはからいによつて極樂に往生する、始終皆自然である。私が去る三十七年の夏、当地で觀世音菩薩の像を作つた。その中に

山間忽ち落つ花一輪、長江万里水上に浮び、
飄然と去来して彼岸に到る、人生百年光悠悠たり。

という四句をつらねた。この意味は、山間に咲いた一輪の花が、ぼたっと谷川の清流に落ちた。それが流れて渺茫（びょうぼう）たる海へ送り出される。谷川の水も水である、それが海へ出て同じく水である。この谷川の水に花の運ばれるように、我々は如来の願力にいろいろと導かれて、次第々々に行くのである。その花は最後には海にまで送られるように、我々も終には極楽無為涅槃界へ入らして貰うのである。谷川の水は願力自然、海の水は無為自然、この二つにくぎりをつけて見ようがない。願力自然の谷川の水が涅槃界、無為自然の海まで引継ぐのである。換言すれば我々こそ未だ涅槃に入らないが、仏は無為自然界から出て来られて、我等を運んで同じ無為涅槃界に入らして下さるのである。そこを和讃に

信は願より生ずれば 念仏成仏自然なり

自然は即ち報土なり 証大涅槃うたがわす

信仰は本願力によって発起し、本願の念仏を喜びつつ極楽無為の報土に入る、これが自然法爾である。よって念仏成仏自然なり、という言辞に、直に自然は即ち報土なりとひっかけてある、いかにも味が深い。次に

形もましまさぬようをしらせんとて、初めに弥陀仏とこそききならい候、弥陀仏は自然のようをしらせんれうなり。

こころ

荒（すさ）んで行く心は人生に背を向ける。しかし背を向けるといふことは人生を真にいとて居るのではない、人生に執着未練を持って居るのである。執着があればこそ背を向けるのである、未練を持ってこそこれを正視することが出来ないのである。

古の人は欣浄厭穢（こんじょうえんえ）と言った。欣浄を背景として厭穢するのである。故に厭離穢土と云いながらその穢土を正視して居るのである、否諦観（たいかん）して居るのである。真に人生を厭う人は人生を諦観する。眼をそむける人は人生の厭わしからぬ人である。

人生が真に苦であることを諦観することはむづかしい。苦の諦観が無いから荒（すさ）んで行くのである。苦しいと云いながら楽しみを期待して居る、それが荒んで行く人の心である。苦を諦観する者は荒まない、それは苦に安住するからである。

肉体の形態をすてて後に入らして頂く無為法身の真実の仏の境界は、何ともかとも思議を絶し離れた不可思議の境界である。始めなく終りなき本覚明了の境界である。あたかも海水の湛然としているに等しい。谷川の水も元は海水から来るように、一如法界から形をあらわし、名を示して法蔵菩薩となり、願をおこし、行を修して十劫成仏を唱えられたのが阿弥陀仏である。これ全く証巻に

然れば弥陀如来、如より来生して報応化種々の身を示現し給うなり

とのたまえるところである。我々は真如とか、法性とか一如とか無為とか自然とかと、口ではいうても、その実は如来広大の境界はすこしも解からぬから、その広大の境から方便法身の形をあらわして、我々を招きたまうが阿弥陀仏であり、又この大事実をこの人生に伝えんがために法身の境よりこの世界に出現して下さったのが釈尊で、和讃に

無明の大夜をあわれみて 法身の光輪きわもなく
無碍光仏と示してぞ 安養界に影現す

久遠実成阿弥陀仏 五浊の凡愚をあわれみて
釈迦牟尼仏と示してぞ 伽耶城には応現す

其他聖徳太子も、法然上人も、皆この絶対の境から現われて、この相對界に迷うている我等を導いて絶対界に帰って下さるのである。

福島政雄

荒みがある。人間を捨離することが出来れば心は荒まないようになる。人間を捨離して人間に処する心は荒まない。それは人間に真に親しむことが出来るからである。迷執の愛は荒み心の根元となる。愛なき人生は荒涼たるものであるとは、吾々の常套語であるが、実は愛あるが故に人生は荒涼たるものとなる、愛を捨離し迷執を断ぜよ、そこに人生の荒まぬ姿が現れて来るのである。

荒む心は漂浪の心である。漂浪の心は人生を茫々たる大海と観する、しかしてこの身は大海に浮べる權（か）い）無し小舟の如きものであると考える。四顧茫茫何のたよるべきものも無いと考えては荒む。此の荒む心は人生を霧の中に見て居るようなものである。人生如々の相を見ずして霧や霞の中において見る、そこに荒む心の根元があるのである。

芸術的心境とは如何、芸術は人間の荒みを和らげるものであると称せられている。しかし又芸術は人間の煩惱の境涯を表現せるものと言ふことが出来る。かかる芸術によつ

て人間の荒みを和らげようとするのは、煩惱を和らげるに煩惱をもってしようとするようなものである。一時は和らぐこともあるが、それは一時の陶酔によるものである。陶酔が醒むれば荒みは更に激しくなる。

文学は酔醒山であるという。文学の酔醒山に酔い且つ醒めよという。それは面白い。併しそれによって荒みは如何になるのであるか。荒みの心が一時糊塗（こと）せられるのではないか。その後更に深刻な荒みの心が起らないであろうか。

荒まぬ心は何処に求むべきであるか。荒むものは機会さえあれば荒む。人生生活のあらゆる心が荒みの心の機会となる。食物に飲物に着物に住居に荒む心は起って来る。食あれば食あるに荒み食無ければ食無きに荒む。有無共に荒みの機会となる事を知る時、吾等の心は有無の彼岸を求め。有無の彼岸にこそ荒まぬ心があるのであるとおもう。

しかし有無の彼岸とは何であるか。それは有にも無にも心が潤うということではなければならぬ。有無を超越したユウトピヤの郷というようなことではない。有にひたり無にひたって着せずとすることである。有っても心潤わず、無ければなお更に心潤わずということとは、この心の底に何等のいのちの通いが無いということである。心の底に無限の温かいいのちの通いを感じる時、そこから有にも潤い無に

る世界である。久遠の親のまことは荒まぬ心である。それは常住に子の荒める心に通うのである。 昭一九・六・七。

自己のすがた

自己のすがたはなかなか見えるものではない。その見えるとおもうのは、多くは作り飾ったすがたであって、決して如実のすがたではない。私の如実の姿は常に何物かの後にかくれて居る。私は自己を美しく妄想して、その美化せられたる自己の幻の中に懈慢（げまん）の夢を食っている。

少年時代には、私は自己を清く美しいものと信じて居た。如何なる場合にも人を信じ、自己の心をそのまま打ちあけて人の助言を求め、たとい人から裏切られても、その裏切られたことにさえ気がつかぬという有様であった。人生は私の心眼の前には天国の園そのままであった。

しかし失樂園はすべての人のさだめである。二十年、三十年、四十年と人生の行路をたどる間に、いつしか、純真の心持は失われて行った。私はひがみと疑いとをもって人生を見るようになった。如何なることが言われ、如何なることが行われるときにおいても、私はそれをすなおに受取ることが出来ないようになった。私はつまらぬ猜疑の心をもって人生を見るようになった。時としては、人生はすべ

も潤う心が新生する。これは信仰の境地である。信仰の境地は特別無類の心境というようなものではない。親がこの自分のために苦しんで下さる心を親のいのちの遠い奥深さに感ずる所に信仰の境地がある。それはありがたいという感じの境地である。いのちがいのちに通う味わいである。冷く荒んでいるこの自分のいのちの奥にひたひたと通うて下さる温い親の慈悲のいのちであり、しかもこの世のみならずぬいのちである、そこには涙がある、荒み行く子のいのちをあくまでもあわれみたまう涙がある。この涙は荒みを融かす涙である。よしや久遠の業報としての荒みであつても融かしつくさずにはおかれぬ広大無辺の涙である。それは目に見えぬ涙である、いのちの底に染みとおる涙である。

人生はこの涙によって洗われ、人間の煩惱はこの涙によって融かされる。荒み行く心は転ぜられて荒まぬ心となる。廻向というは賜物である。何処までも荒み行く心がこの賜物に融けて行く。そこには常住に荒み行く心とあくまでも荒みを融かすいのちとの接点がある。人間は一人一人がこの接点に立っている。荒み心が無くなったとは言えない、併し如何に荒む心も融かされて行く。それは念仏の世界である。念仏の世界とは仏々相念に撰取せられて行く世界である。仏々相念の世界は久遠の親のまことが響きわた

て陥穽（かんせい）だらけであるという心さえ起こした。

元来が孤独性で非社会的である私は、他人とうまく接触交際して行くことが出来ない。私は独り語りは出来る、一人対一人の対話ならばまだしも出来る。併し三人以上の集まりとなれば、私は全く駄目である。皆の心をよくまとめるような座談をすることは、私には出来ない。従つて、会議などに列席しているときも沈黙して居ることが多い。うまく機会をとらえて発言することが出来ないのである。

しかし一方においてこの十余年の長い間、講演などに多く引出されてばかり居た私は、講演のときは沈黙を破らざるを得なかつた。次第に私は講演することに慣れた。そして本来が感情的である私は、しばしば講演に際して熱をあらわすことがある。私は諄々と説いて行くことは出来ない。熱してこれを説き、直に人の肺肝にせまりたいという心持を大いに持って居る。

それで孤独性で非社会的でありながら、人間に対して大いに求むるところが私にはある。これは確かに性格上の矛盾である。私ほど人間に対して貪りを持つ者は少ない。私は実にこの上もない煩惱性の人間である。この性格が私をして人生に対する悩みを深からしめるのである。あっさりとも風月を談じ、世間話をして交際して行くというのが、交際の法であるが、私にはそれが出来ない。従つて私は

始終人と魂の触れないことを考えて淋しがって居るのである。

素直に人生を見ることが出来ないようになった私が、最後に落付いて行くところは宗教の世界である。その宗教の世界というのは、絶対無限の親心のまことの世界であり、私の魂はその親心のまことに潤おされてひがみを直され、疑いを融かされて行くのである。

故に宗教の力は私の生命の根底に動いている。この宗教にはわかには鮮かな生活の革命となって現われるようなものではない。空気のようなものであり、日の光のようなものである。或は又米の飯のようなものである。味無きに味があり平凡な生活を平凡につづけさせて行く生命の泉である。

この宗教の世界において、私には始めて自分の姿が見えて来る。光に照されて自己の如実の姿が見えて来るのである。親心のまことは、私がひがめばひがむほど私をあわれみたまう。その大悲の胸にいだかれて、私は煩惱の自己の姿をそのままに見せつけられるのである。併し見せつけられて徒らにその煩惱に悲泣するのではない。大悲のふところにしみじみと涙するのである。

その涙は忘恩背徳の私が撰取せられ行く涙である。此の中で様々の御恩を受けて居りながら御恩を思わず、自分が生い立ったのも、生きて行くのも、学問をするのも、

よろこびのあと

(二)

菅瀬忠子



昭和九・七・九日。

明治四十一年三月十二日、先ず食事を了えて仏参いたしたが、兎角御慈悲より遠ざかりいるとは浅間しき事。この日午後一時鷹谷様いらせられたれば、御仏のお話させていだきたり。有難き事なり。下女なども少しはきげんが悪かったが我は依然として怒らないのである。鷹谷様の御出でになりたる為、御話をいたして時間をついやした。余り此世の事に執着しないで御信仰家のいらした時だけはと思ひて御話に出まして種々よろこばして頂きました。時も移りて五時頃となりたれば台所が気にかかりたる為久し振りに台所で働くべく出かけた。漸く三年も経って今日に至り自分は多くの学生の世話をしている身なれば、大なる責任ある事を始めて気がついたのである。嗚呼これも鷹谷様が御信仰家である余徳かと後より慶ばして頂いた。吾は半年ばかりは国語の検定を受けようと考えこんでおった。かねて主人は財政困難なる処へ私がそんな事を申しては誠に主人に対してすまぬわけであったのである。然るところ吾

子を育てるのも、様々の御恩の力、殊にその根本をなす大なる親心の御恩によるものであるものを、それをさとりもせず、他人の忘恩を責めて自己の背恩を気づかず、あくまでも自己の正善を主張しようとする私の心、そこに私の根本我執があり、根源の阿頼耶(あらや)の無明の暗がある。久遠劫来の迷執のすがたこそは私の姿であり、それは、如何なる相對の努力修養によってもよくならぬ、根本の病める魂のすがたである。

この姿は私が一時に全分を見ることが出来ない姿である。私は生活上の實際問題に当面するとき、背徳の自己の有様に驚き、そこに久遠劫来の我執の自分の姿を見る。即ち實際問題を縁として私は自己の姿に目ざめて行く。この自覚こそは大悲の親心の心光裡(しんこうり)の自覚であり、それはやがて私の生命の根源を潤して、私は自己の性格の偏執を唯この親心に潤おわされて、静かに人生に立つて行くべきことを行つて行く、凡夫としての私の生活はこれに支えられて永劫に到るのである。

の身の上は学問などする時代は過ぎ去りて今は人の妻となり、やがて人の親となる身が学問などとは、浮いた調子の考えばかりを持つておった。実に慚しい事で或時は今の下田先生の御処へ行くのもやめようかと思つた位であったけれど、併し佐藤一斎先生の「一息の存する学廃すべきに非ず」と云う御言葉を思い出した為、学園の世話をした余りの時間を以て勉強すべく考えた。前に一度奥様は余り無責任であるからと云われた事があって、その時は非常に苦しく感じた。如何にも自分にも半分以上責任ありたと思つた。又芝田奥様の夜分休む時は必ず台所を見廻りて休むと云われたが、如何にも自分が悪かったと人の子を預り居りて、人並同等の考えを持つて居つたことは仏陀に対して恥しき事なり。嗚呼思えば今日迄の行いはよろしき事なし。又前に鈴という下女のおりし時は一度節儉いたしたれど、自分はその後勘忍袋の緒がきれて又随分金を使つた。併し只今は「勿体なや祖師は紙子の九十年」との御言葉により、如何にも父上の感化力、はた今年は如来の御冥見を恐

れて食事も少食とし、又主人にも頼みて夜分九時までには必ず帰宅いたされるようにと頼みたいと思うのである。又主人の処へ時々折角他より御法義をと聞きに来る人を大切にせねばならぬ。蓮如上人の御言葉にも遠方より法を聞きに来る人あれば、必ずその人達に愛想をしてかえせと申された事がある。

「開山聖人御一大事の御客人と申すは御門徒衆のことなりと仰せられしと云々」

「御門徒衆上洛候えば前々住上人仰せられ候、寒天には御酒等のかんをよくさせられて、路次のさむさをも忘れ候様にと仰せられ候、又炎天の時は酒などひやせと仰せられ候」

かくも求道者をいたわりて、衆生済度して下されたとは実に有難いことなり。この世は仏恩の大慈悲にて自分の台所について大責任のあった事を思わせて頂いたのである。嗚呼うれしや南無阿弥陀仏々々々々々。学生共の喜ぶを見ては、皆如来様の御子様にかくも粗末なる食事をさせて置くは、はた又是れ迄よく彼等が堪忍をしてくれた事は感謝致すところである。嗚呼自分は、まちがって居ったと深く懺悔いたすのであります。南無阿弥陀仏々々々々々。嗚呼我は主人から申されるように決して学問などする者ではない。只家の内の事ばかり注意しておって主人の云われる

無阿弥陀仏々々々々々。この夜は吉崎氏と話した。又下女などの歌をうたうをききて可愛く思うたのである。

○ 三月二十三日 今日福間様に参る途中、泉兄上と主人と三人で御法義話を致しながら参る道にて、自分は如何にも信仰を得たかの如く思われたが、いやいや又々浅聞敷い考えが起ると思ひ返した。果して福間家に居る時から浅聞敷き考えのみにて、帰途種々の事のみ考えてかえったが、帰りに見れば土産物をいただきおるやら、又下女はうまく内を世話して呉れたもの故非常にうれしく思うた。嗚呼この夜も子供等の可愛いのを見ては喜ばしていただいた。南無阿弥陀仏々々々々々。併し自分は今非常に苦しむ事もあるが「物皆前に定む」を思い出して、何事の事かと思ひ返した。

○ 三月二十五日 朝の仕事を終えたのが九時半頃であった。其内常友氏などが来られた。引続き泉兄上も来られた。彼是十二時になりたから先ず食事をすまして又洗濯などにとりかかった。其後清涼様が入らせられた。御帰りの後増山・橋二氏が入らせられた。其内夕食となりた。此夜藤戸氏も入らせられた。この日は朝より深く如来の御慈悲を感じ落涙したのである。思えば清涼様が学園へ御寄附下

事をよくききて働いて居ればよいのである。尚又我は今に人の親となる身がいつ迄も書生の氣でおっては誠にはずかしいのである。自分は社会の最貧民と云うているが、併しながら物は過ぎたるはなお及ばざるが如し。又物事の中道を得ることは難いことなり。

夢の世に夢とも知らず夢を見て

夢より夢に移る夢の世

三月十六日 今日子供等には可哀そうでありましたが、親鸞聖人の御命日なれば精進させなければいけないと思ひて精進をさせました。下女より種々の小説や芝居の話を書きましたが其れもうれしく尚我身の仕合せを喜びました。時に妻木・島地様など入らせられたにつけても嬉しく、又佐伯様入らせられても藤本氏話されたからその時も種々と話をききました。時移りて袖を縫うてから夕食になりた時に非常に如来の御慈悲を感じました。嗚呼藤本氏も哲次も良造も綾子も勘六も捨雄も可愛や尚又藤戸信一、関氏など非常に可愛く今日は能く精進をして呉れた。親が貧しき為に子供に御馳走がやられないと思ひて便所で悲しみました。この夜は精進でありましたから自分は斯く思いました。親が子供に平常粗末な物を食べさせて置いた為、よく食べてくれたと可愛く思ひ、なお子供等の歌など歌うをききては可愛く思ひました。嗚呼斯く……いやいや、南

されたのも御導き、学生達の信仰話を聴きに來られたのも御導き、増山氏のも御導き、藤戸市来園も御導き、泉兄上のも御導き、嗚呼如何にも有難き事なり。南無阿弥陀仏々々々々々。学園は成功しないでも南無阿弥陀仏は朽ちる事はない。否成功の見込あると自信す。御念仏は絶えず出ます。「御文章」に出ずる息は入るを待たずとの御言葉全く有難い事。

○ 三月二十七日 今日朝より福間氏を送るべく思ひて朝主人を根岸に立たせました。私は湯にゆき中食をしまつて御還（かえ）りを送った。その途中は如何なる善因ありてか今日父上の御還りを送るかと思えば涙も出ずるばかりにうれしく、又新橋にては福間家の人々が根岸笹雪に御住いの時のことなど心に浮かび、如何にもなつかしく又自分は一人の兄上を設けたと思ひてうれしくてたまらなかつた。又嗚呼現在学園に居る人も如何にしてか早く信仰に入りて下さればよいと祈る如く思うた。色々その感に打たれているうち三時半となり汽車は西をさして発した。嗚呼々々南無阿弥陀仏々々々々々。自分は福間氏と段々肉体は離れて行くが、然し心はやはり同じ悟りの浄土に住む身、何とも云いようなき感じが致した。「有漏（うる）の穢身（えしん）はかわらねど心は浄土に遊ぶなり」不思議にも帰途

電車にてはただ念仏のみ称えておった。又吉崎氏も早くわかりてくれればよいと祈る如く思うた。其内本郷四丁目の宝閣様の宅を伺つて奥様にも御遇い申した。この日うれしき事にはこの度知人の奥様など集りて信仰の会を開くよう申され、誠に自分はいれしくて何となく心の中にたのしく感じた。同時にただ園員の信仰なきを深く悲しむと共に我身はよろこびの極に達した。念仏三昧にして如何にもうれしく思うた。藤井様の宅に伺つたら泉兄上もおいでになっていた。兄上に会の講師を御依頼いたすべく思うたが、何分にも兄上は御忙しき御方なれば未だ確定しないで御別れた。日は暮れはてて宅に帰りて見れば日高氏来園せられていた。姉上から手紙が参りておつたけれども先日来の趣に変わらぬ様子にて是非下だれとの御言葉、我もちよいと故郷に参りて焼香いたしたく思うなれども、併し我も昨年来考えおる通りどうも下だるのは自分にも大きな責任があるにもより、尚仏陀の御慈悲をしみじみと喜ぶ事もむずかしく、却つてそれよりも近角先生に御依頼して御読経を願ひ、しみじみと如来の御恩と、両親の御恩とを慶ばしていただかんと思つて自分で定めた。如何なる御両人の御言葉があるとも吾は依然として動かないのである。即ち仏陀の大悲を慶べば別に帰郷しなくとも宜しからん。私は昨年来両親におわびを申し上げている、常に両親に懺悔している。

又人並ならぬ大責任のある身如何にして帰郷いたされようと、仮に女心に定めたのであるが、然し夫のある身一応主人に相談を申上げる事をきめた。南無阿弥陀仏々々々々々々。

○

四月一日 今日夕べから引きつづいての夢やぶれて又目がさめた。併し今日だけは休みておらんと思つておつたが、いつまで床に居りても別に変わらないと思つて又思ひなおして床をはなれました。すると麻田氏も訪ねて下された。この日はぼつぼつと気分がよろしくなりました。二時頃泉兄上がいられられた。吉崎兄上も大変信一氏に同情して下された為信一氏も及第ときくからは非常にうれしく思つた。嗚呼兄上方が二人程信仰に入りておるからはもはや大丈夫と思つた。併し早く良造氏も信一も信仰を得てくれないと園母はたまらないようである。この日は別に何も致さずぐずぐずして一日をすこしたのである。併しやはり又元の如くにはなりませんのであります。嗚呼自分は斯く思つた、我こそは五年も十年も休まないでいようといばかりでおつたが、愈々自分の力で如何にいたす事も出来ない気がつた。ただ時々思ひ出しては南無阿弥陀仏々々々々々々。冥加に余る御大恩々々々。父上が御存命の時常に冥加に余る御大恩々々々と喜ばれた。この夜は御蔭様でよく

休まりました。夜中に思ひ出しては南無阿弥陀仏々々々々々々と念仏しては又休んだ。御慈悲の御仏は「忠子」よくきいてくれたと夜に風に喜んで下されるであらうと思つた又うれしき事、何を思つてもうれしや彼思つてもうれしや。嗚呼、南無阿弥陀仏々々々々々々。

泉兄上は翌二日を以て神戸に赴かるるのである。但し我の泉様を兄上と申上るは泉様も御信仰に御入りあそばしたる御身、この無学の忠子も御信心いただかして貰うている身、さすれば彼は年長の事なり、我は年が少い故に泉様を兄上と申したるなり。故に我は妹なり、常に泉様のおいでになるは、我は兄上が御いでたと云うていつでもとんで出るのであります。又我々は今一人の兄上がりましたが、この方は去月広島県江田島にお帰りになりました。今は泉兄上と我と二人なのです。併し又福岡父上の御子甲松兄上もこの頃は信仰に入られましたそうです、今は兄弟三人となりました。

これこそ万劫も変らぬ兄弟であります。併し今は近角姉上御里においでですから、妹一人はさびしいのです。私は姉が少くないのです。ききますと藤岡様の奥様も姉様です。嗚呼今は福岡母上は京都に入られます。丸茂母上は桜木町にいられます。英母上は鈴鹿にいられます。私は妹もありません。学園の兄上は皆仮りの兄上です。早く兄上は信

仰を得て下さればよいと毎日思います。近角兄上様はこの頃は御多行中じゃそうです。うれしき事にはこの五日には御参りができますように思います。南無阿弥陀仏々々々々々々。

はやく信仰に入りて下されよと頼みます。内にも兄上はたくさんおられますが、まだほんとうの兄上ではありませぬ。中にも吉崎良さんは学園に長くいられました。また私の国と一しよです。それから日早く信仰に入りて下さればよいと思つて置きます。なぜこの世の事に執着しておるのでしよう。ヤヨ兄上よ、妹の気を汲みとり早く信心をもつて下されませぬか。ヤヨ良兄上よ私は彼一人が信心を得て下されば大変うれしく思いますのよ。この世の中に生れて来て法をきかずに帰りてくれると困ります。又かきましようよ、午後「求道」など拝見いたせば、有難くて落涙すれども、又書物を拝見せずにいると又おうようになります。兎に角に念仏三昧するが宜しい。

(続)



念 仏 詩 抄

木 村 無 相

いただくだけ

// 汝の出離は

まかせよ//

ナムアミダブツの

おん仰せを

ナムアミダブツと

いただくだけ

アトもなければ

サキもない

ナムアミダブツと

いただくだけ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

仰せだけ

仰せだけ

仰せだけ

ただ

ナムアミダブツという

仰せだけ

助かる道

わたしの

たすかる道も

ナムアミダブツ

あなたの

助かる道も

ナムアミダブツ

如来さまの

助かる道も

ナムアミダブツ

イノチ不思議

ここに

こうしてわたしが

在る不思議

不思議

聞其名号

// 聞其名号 信心歡喜 //

一蓮院師おおせに

// ただ仏のお力一つで

助けて下さると信するほか

には

聞其名号のイワレはないと

聞いておりますが //

香樹院師おおせに

// それでよし

それでよし //

それでわるくても

仏のお力一つ //

ナムアミダブツ

トシが明けたら

七十二

よくまあ今日まで

生きたもの //

一蓮院師おおせに

// ただ御不思議に

おまかせして

念仏申すばかりで

ござりますか //

香樹院師おおせに

// 不思議といえは

今日までイノチ長らえたのが

早や不思議じゃほどに //

如来にイノチ

いただくきて //

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

不思議

不思議 //

今

ナムアマミダブツ

背のびしないで

このままで——

ナムアマミダブツの

呼びかけを

ナムアマミダブツと

いただいて

このまま助けて

もらいましょう

背のびしないで

このままで——

立て

たおれたら

立て

ナムアマミダブツと

立て

立て

お慈悲というたら

お慈悲というたら

どこどこまでもお見すてない

〃お慈悲〃——

それでなければ助からぬ

わたしが助かるハズがない

どこどこまでも

聴聞は キライ

どこどこまでも

念仏は キライ

仏法ギライのこのわたしが——

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

現代と浄土真宗

一、まことなるもの

先年ミロのヴィーナス像が人々の眼を驚かし、モナリザの微笑像が東京でもモスクワでも人々の心を打った。まことなるものは、時代の垢がつかず、人々によって濁らされず、かえって垢と濁りとを浄化して、時と所とを問わず、いつも生き生きと万人の心に光を与えるものである。

真宗とは釈尊の真実の精神であり、三国七祖と相承された真宗の教で、古代、現代、次の世代を貫いて、東天に昇る太陽が常に仰ぐ者に新鮮な光をあたえてやまぬ趣きがある。このことをしっかり身につけていないと、とんでもない迷路に入り、邪道に走る。科学がいつも新しいものを追いつながら常に古くなるように、時代の様相や思潮も変わる中で人々は新しいものに心ひかれるが、それもやがて古いと捨てられる事を知らねばならぬ。はてしない流転を定めとする我等に、まことの念仏の燈火を掲げて念仏無碍の一道を生よるべ死の帰する道ぞと聖人がお勧め下さるのである。

花田正夫

二、聖徳太子を仰ぐ

現代の日本には難問題が山積している。経済の不況とインフレ、倒産と失業、政治の不振、自然の破壊と生命の軽視、教育の格差と受験地獄、宗教の形式化等々である。

これに直面して我等に大きな指針を与えて下さるのが聖徳太子の歩みである。想うに千三百年前の日本は文化は開けず、閥族は横暴を極め、内政は紛糾し、外交は動乱して、文字通り内憂外患の時代に、若冠二十にして太子に選ばれ、聡明にあらただけに現状を見、将来を考ええられてどんなにか苦悶せられたことであろうか。

その末に、御自身の心が暗いためと自覚せられて、二十二の御時三韓から渡来した慧慈・慧聰を師として仏道を求め、三十歳頃に心眼が開かれると、人材登用の途を冠位十二階に開き、国法を十七条憲法に定め、外は随・唐に留學生を送って文化の興隆の端緒を開かれたことは何人もよく知るところである。爾来国難の起こる毎にわが国民は太子を慕い続けているが、わが親鸞聖人は太子を觀世音菩薩と

も、久遠の慈父母とも、その御信徳を渴仰していられる。

さて太子の歩まれた道を仰いで、一人一人が僧俗を問わず、現代に処して自身の信眼をどうして開くかが最も緊急なことである。「道は開かれたり、閉ざされたるは汝自身の眼なり」とのゲーテの言葉も思いあわされる。

敗戦の苦難を背負うて日本は三十年近いが、二つの超大国の間であつて、資源を外国にたより、製品を輸出して経済は成長をしたが、食糧まで外国に依存する我国は、齒車の一つが狂うと忽ち大動乱におちるのは必然である。こうした中で青年学徒は思想の自由の下に、身の保全を願う者も多いが、或は左に偏し、或は右に傾き、或は極端な暴挙に走るという始末である。そのいづれも、自分自身を知り、自身を開眼することを置きざりにしている恨みがある。もっともこれはどんな時代にも繰り返され陥り易い盲点ではあるが、今こそ太子に学び原点に帰らねばならぬ時である。

三、自分を知らぬ道

先ず自分の場所が分からぬと方向が定まらず、自分の能力を知らぬと方法も立てられぬ。さてこの自分を知らぬについて、自分の顔が自分で見えず、山中にいては山の全体が見渡せないように、一番大切な出発点であるのに自分を知らぬことはまことに至難である。真面目に内省しても身びい

からない。そこで子を持つて親の恩も知れるとあるから、愛の実行が出来たら分かるだろうと思いついた。併し隣人を愛し、敵を愛することが出来ないばかりか、母親をさえ冬は重宝がり、夏は邪魔にする火鉢あつかいしか出来ない身と知らされた。ここにラジオもテレビも無いと、電波が流れていても音声も映像も現れぬように、愛の神はあるかも知れないが、私には無いも同様であった。

最後に清水精一氏の御紹介で、懺悔の生活の一灯園を訪れた。「無一物中無尽蔵」の境を求めて下坐行を勧められた。この教の大切さは云うまでもない、落ちてくるリンゴを謙虚な心で観察したニュートンに目に見えぬ引力の発見があり、竹のことは竹に習えと云った芭蕉は「見るものに非ず」ということなし」と地上の到る処に妙趣を発見している。一切の文化がこの下座の畏敬の眼、驚異の眼から開かれることはよくわかる。噫、しかし、煩惱の塊の身には、すこし善らしいことをすると、我よしと魔がさし、やがて他をさばき、独善の牢獄に縛られる。瓦をどんなに磨いても玉にならぬように、自分で自分の始末のつかない厚い壁に突き当たった。

このように立派な教の鏡に照らされて、教はみんな貴いけれど、ついでに行けない自分を歎くばかりであった。宿無し犬同様の彷徨（ほうこう）をしていた私に、伯父から歎

きな心があつて、ひとりよがりの自分しか見えぬ。

ここに鏡に自分を写す道がある。諺にも「十指のゆびさすところ」を大切に受けよという。然し他人もまた不完全な、身びいきな心の持主であり、その上時代によつて価値判断が変わるのだからそれが必ずしも正確とは云えない。そこで私は、少くとも千年以上にわたつて人類の指標となつた聖賢の教を鏡として選んだ。孔子、ソクラテス、キリスト、釈迦の四聖である。

私共は中学の頃から論語を教えられていたので先ずそれを読んだが「聖人は独り居て慎（つつし）み、小人は閑居して不善をなす」の誠めにより、小人の自分が知れ「志士仁人は身を殺して仁をなす」とあるが、私はいざとなると人を殺しても生きたい利己心のかたまりの身で、その教はとでもついでに行けない高嶺の花であった。

次に「汝自身を知れ」との神託を掲げたソクラテスは「我は何事も知らざることを知れり」と愚者の自覚をもつて、人師を嫌ひ、青年と共に道を求め、毒杯を飲まされても真実を守り抜いたことを読んで、彼は智者なればこそ自分の愚を自覚出来たけれど、私共のような愚者は、知つたか振りして頭をあげることしか出来ない、全く手におえない鈍物であり臆病者と知らされた。

次に聖書を繙くと「神は愛なり」の一番肝心なことが分

異抄を勧められた。驚いたことには親鸞聖人御自身が「いずれの行もおよび難き身なれば地獄は一定すみかぞかし」とか「善悪の二つ総じてもって存知せず」とか「仏かねてしろしめして煩惱具足の凡夫と仰せられたることなれば他力の悲願はかくの如きの我等がためなりけり」等々と、御自身の愚者悪人の身を慚愧されて、たすかるところの絶えてない身の隅々まで満ちわたる大悲の光明を渴仰されているのを知られた。ここに我身の愚悪のために助かるよすがの無い身、誰からも捨てられ、かえりみられない私に、さしのべられた大悲の御手を知らされ、本願の懷に帰る念仏の法乳を頂き始めた。

四、自然の顕現

一昨年、八十五歳で亡くなられた白井成允先生が長女の明子様に「明子も今後の生を念仏の中に生きて下さい。念仏申しているうちに必ず道は開けてくるのですから」と書き残された。本願を信じ念仏申して生きさせて頂く時、仏の願力の自然として、罪障の多い英の道が自然にひらけて来ることを、先生は八十五年の御生涯をとおして体験された上の御遺言であった。

道元禪師の歌に「春は花夏ほととぎす秋は月冬雪さえてすずしかりけり」とあるが私はこれを念仏申し申し自分の業道に随順して歩む時、自然に人生の四季が荘嚴される妙

味と頂いている。即ち青年、壮年、老年、死後の四季を貫いて、その時期々に現れるかけがえない法味である。又、人々の顔が異なるように、業道も別々であるが、秋の野山を七草が飾るように、智者が慢心の毒を転ぜられ、愚者が卑屈の毒を消されて、各々のもつ本来の面目を發揮して、紅い花、白い花、大きい花、小さい花と、それぞれに地上を莊嚴する。

個人の上にもこの様な顕現があることが源泉となつて、念仏を心のともしびとし、心の羅針盤として貰えるよい機縁となり、そのまま他の人々の解決の端緒となるものである。「大悲の願船に乗じて光明の広海に浮かびぬれば、至徳の風静かにして衆禍の波転じ、即ち無明の闇を破す云々」と聖人が讃仰せられたのもその消息である。

五、生命の尊嚴

生命と物質とどちらが大切かとは何人もよく語っているが、物欲のために眼が曇らされると、いのちが軽視される。生産の向上に目がくらんで公害が増大し、土地開發の行き過ぎから自然が破壊されて鳥獣はもとより人の生活に暗い影を投じている。

ここに生命の尊嚴の自覚が重大な問題になるが、私はその原点を「奇なるかな、一切の衆生はことごとく仏生を有す」と成道の暁に仰言つた仏陀の教えに見出すのである。

が、老人の自殺者の数は少なくないと聞く。ここにどんなに物質に恵まれてもそれだけでは生き甲斐を失い絶望の淵に沈むことを教えられる。あくまでも内に真実の教を身につけ、生のよるべと死の帰する道を得ることが大切である。

最近肺ガンで亡くなった孤独な八十の老女Kさんのことを御紹介しよう。Kさんは若い頃貿易商だった主人に死なれ、次に子供さんにも先き立たれて、孤独の身になって養老院に入ったが、肺結核の為療養所に転じ、昨年になって肺ガンと診断され、本年一月十七日に遂にやすらかに往生された。その間、幸に念仏の御縁を持たれたが世間の例にもれず、あれこれと自分の心を苦にして聞法しているうちに仏の本願の御真実一つに助けられることに大安堵の身となった。大病がすすんだ昨春秋には「長いおそだてのお蔭で病と友達となれました。又病苦の中からも仏様の深い御恩に気づかせて頂くにつけ、これも病氣のお蔭であります云々。」との法信を下された。肺ガンの末期とて激しい苦痛の時は愚痴も出たけれども「病を友達とし」又「病のお蔭」と病氣を拜んで受けとる心境が鮮かに開けているのを尊く有難く読ませて貰った。

これは一例にすぎないが、福祉問題の上で死の闇を破つて下さるみ光を如来上人から恵まれる真宗人の果たすべき大きな仕事のある事を痛感せしめられるのである。浅原才

法華経には、常不輕菩薩（じょうぶぎょうぼさつ）が一切有縁の人々を「あなたも仏になれる人だ」と拜まれたとある。私共は煩惱に遮られて心暗く、疑心暗鬼で、人を見ては泥棒と思えという程に利害得失だけに走って、人間不信におち、不安と猜疑と焦慮を繰り返して、はては殺人や自殺が毎日のように報道されている。

噫！このような浊世にあつても、仏陀は私共のいのちの深みに尊い仏性を見出して下さつて、私共は仏や菩薩に常に拜まれているのである。但し、木に火の性があつてもそのままでは燃えないが、他から火を点ぜられると燃焼するように、私共も仏や菩薩に点火せられて煩惱の薪木が菩提の火と転成する。この点火して下さる大切な火種は「称えやすくたもちやすい名号」にある。そこに老少善悪のへだてなく、煩惱具足、罪惡深重の身に本願の名号を与えて念仏成仏させて下さるのである。

仏菩薩に拜まれ、常に念ぜられているいのちの尊さにわれひと共にめざめて自愛自重して、いのちの限りをつくし各々その面目を果たしたいものである。

六、老人の福祉

医学が進んで不治だった病も治るようになり、老人の数は増加し、昔の家族制度はなくなつて、老人の福祉がしきりに叫ばれてきた。スエーデンは福祉が世界一といわれる

市の「才市いくつになつた、六十五になつた。この世の日の暮はあの世の夜明けなり、御恩うれしや南無阿弥陀仏」とは私共への大きな指針である。

× × ×

源信僧都御歌

さとりえて思いとく日にあひぬればほどなく消えぬ罪のあわゆき

月花のなさけもはてはあらばこそ常なき世にはこころとどむな

法の道しるもしらぬも渡すべし極楽へゆく船の便りに

同じくは弥陀の誓をしらせばやともに称ふる人の心に

夜もすがら仏の道をたずぬればわがここにぞたずね入りぬる

あとがき

今日、五月十五日は四十三年前、軍部のため政党内閣が崩壊した日でありました。

時の首相、犬養毅氏が突然侵入した兵隊に、「話せばわかる」と云った時「問答無用！」で発砲したことは悲しいというより怖ろしい事件でありました。或人の言葉に「浄土では言葉は不要、人界では言葉が必要、地獄では言葉が不通」とありましたが、独善、独断の世界では問答無用で殺合いの末、強い者勝ちとなり、道理は見失われて暗黒に落ち、疑心暗鬼におびえねばなりません。今日一日心をあらたにして自分の足跡をかえりみ、私自身が多くの人々を傷つけて来ましたことを謝しております。

六月二十九日、教育テレビの宗教の時間に、京大の東昇様と「生と死」という題で対話をたのまれ、すでに録画しました。東様は二年前心筋硬塞で突然老いと死に對面、そこにただ念仏無碍のたのもしさを深く感佩せられました。私共は老いを拒否し、死に眼をそむけて生きることはかりを考え、忙しい忙しいと煩惱の奴隷になっておりますが、そうした中にも老いと死が拒むことの出来ない力で押し寄せて、意識下に不安と焦慮と空虚と絶望がおそうてまい

ります。西哲の言葉に「中年以後死の解決を得た人だけが最後まで生き生きとした生活をする」とありますのも、大いになづかされますことでもあります。

先月号に続きまして、菅瀬忠子夫人の「よるこびの跡」を頂きました。菅瀬芳英師に嫁がれて、師の清貧の中に念仏の一道を歩まれ、学生方の世話もせられる生活のよき伴侶としての真剣な記録であります。近角きそ子夫人はよき理解者で、忠子夫人は度々お訪ねになつて何かとお導きをうけられました。唯惜しいことはお若くして亡くなられたことではありますが、その信徳はこの日誌を通じて薫香を沢山の人の心の上に放たれました。

なお名刑の三好印刷所の都合で印刷が月おくれとなり皆様方にご心配おかけしておりますことをおわび申します。なるべく早くと依頼いたしておりますので、そのうちに月内に御届け出来ることと思いますが、御了承下さい。

心筋障害で静居をすすめられてすでに二十五年すぎましたが、その間小冊子ながら皆様の御理解と諸先生の御念力に支えられて月々発行させて頂きましたことを改めて深く御礼申し上げます。

〔御案内〕

○一道会例会。毎月、第一、二、三日曜、午後一時半。南区駈上町二の八八、一道会館。

市バス、新郊通り一丁目下車。地下鉄、新瑞橋終点下車。

○教西寺法話会。毎月二十四日、午前午後昭和区小椋町二丁目四番地。

市バス、北山町、又は御器所通り下車。

○八月はすべて休講させて頂きます。

定価 半年 五〇〇円 (送共)
一年 一〇〇〇円 (送共)

名古屋市南区駈上町二ノ八八
編集・発行人 花田 正夫

電話八二一局七〇三七番

愛知県西加茂郡三好町大字福谷
印刷 坂部 光雄

名古屋市南区駈上町二ノ八八

発行所 慈光社

振替口座 名古屋 一〇四七〇番

郵便番号 四五七